

氏 名（本 籍）	加澤 昌人(秋田県)
学 位 の 種 類	博士(文学)
学 位 記 番 号	甲第115号
学位授与の日付	令和3(2021)年3月25日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条第1項
学 位 論 文 題 目	上杉謙信の崇敬と祭祀一藩政期の御堂と明治 期の上杉神社を中心として一
論 文 審 査 委 員	主査 今堀太逸(佛教大学教授) 副査 八木 透(佛教大学教授) 副査 貝 英幸(佛教大学教授)

[1]論文の概要

戦国武将は絶え間ない戦に勝利し、支配者としての地位を確保すると、家臣相互の紛争を抑止し領国の統治を安定させるため家法や分国法を制定した。また、その一方で家臣や民衆の支持を得るために、各地の神仏に祈願し、支配の正当性を主張する起請文を作成、神仏との契約を結んでいた。

武士の祈りや神格化については、思想史・宗教史の研究対象として関心がもたれ、豊臣秀吉の豊国大明神、徳川家康の東照大権現の研究はよく知られている。しかし、明治初期の神仏分離、その後の神社統合政策により祭神の合祀化が進み、神として祀る本来の意味の検証が困難なものとなっている。したがって、研究対象や時期が限られたものとなり、祭祀やその意味、その歴史的変遷を長い時間軸で問うことが研究課題の一つとなっている。

そのような研究状況のなか、本論文は、上杉謙信の生涯における戦と信仰、謙信没後の崇敬と祭祀の歴史的な展開を、米沢藩を中心に論じたものである。論文は、謙信の戦と寺社信仰、米沢藩における崇敬と祭祀、上杉神社の建立とその崇敬の三部、十一章の構成となっている。最初に本書の構成を示した上で、各章の内容を紹介しておく。

序章

第一部 謙信の戦と寺社信仰

第一章 謙信の「第一義」と一般論の「義」の戦との相違

第二章 謙信の上洛と信濃・関東出兵の大義の獲得

第一節 長尾爲影・晴景・謙信三代と朝廷幕府

第二節 八幡宮への祈願と出兵の大義

第三章 謙信の願文にみる「筋目」と「仏法と王法」

第一節 飯塚八幡宮への祈願と「仏法王法」

第二節 弥彦神社への祈願ー謙信の「節目」と信玄の「悪行」ー

第三節 看経所への祈願「仏法王法」の回復

第四節 署名「謙信」祈願文

第四章 謙信の法体ー高野山無量光院清胤との関わりを中心にー

第一節	謙信と禅宗寺院
第二節	高野山無量光院清胤と謙信
第三節	無量光院との師檀契約と謙信の法体
第四節	高野山における謙信法体の承認
第二部	米沢藩における謙信の崇敬と祭祀
第一章	景勝の米沢転封と御堂の建立
第一節	御館の乱と景勝の上杉家相続
第二節	越後時代の謙信の供養
第三節	景勝の会津転封と謙信廟の移転
第四節	徳川家康の会津攻めと景勝の「筋目」
第五節	景勝の米沢転封と御堂の建立
第二章	歴代藩主の葬送と供養
第一節	景勝の遺言状と定勝による景勝の供養
第二節	歴代藩主への「法印権大僧都」贈官と法音寺の院室兼帯
第三節	上杉家と江戸浅草の寶蔵院
第三章	御堂における宗教儀礼
第一節	御堂内陣の構造
第二節	御堂の恒例行事
第三節	謙信及び歴代藩主の供養
第四節	怨霊供養の祈祷
第五節	藩主初入部後の御武具召初
第四章	御堂における上杉憲政の祭祀ー怨霊から御家擁護神への転換ー
第一節	憲政の死と照陽寺における供養
第二節	米沢藩における憲政の祭祀
第五章	御堂の焼失とその再建
第一節	二の丸寺院の火災と賞罰
第二節	蔵王堂・稲荷堂の狐の霊驗譚
第三節	御堂の火災と再建
第三部	上杉神社の建立とその崇敬
第一章	謙信の祭祀の転換ー御堂から上杉神社へー
第一節	幕末・維新期の米沢藩と藩主斉憲(なりのり)
第二節	御堂における謙信の神祭の開始
第三節	上杉神社の建立
第四節	別格官幣社への昇格と追贈
第二章	屯田兵による神社の建立と米澤有爲會支部における上杉神社の遙拝式
第一節	屯田兵の入植とその生活
第二節	上杉神社遙拝式の開催
第三節	神社の建立
第四節	他藩の神社建立と遙拝
第五節	米澤有爲会の各部会における上杉神社遙拝式

結語 研究の成果と課題

序では本論の構成と目的を論じている。第一部では、上杉謙信の生涯と信仰について、彼の戦と寺社信仰との関係から捉えた考察を、次の四章より行っている。

第一章では、謙信が林泉寺に奉納した扁額「第一義」について、その由来と謙信における「義」の意味するところを検討する。第二章では、謙信の上洛と信濃・関東出兵の大義の獲得について考察する。第一節で長尾爲影・晴景・謙信三代と朝廷・幕府との関係について、越後の戦国時代の始まりと謙信の登場、謙信の御旗、謙信の叙任と上洛、領内での一向宗の解禁について検討している。第二節では、更級八幡宮への祈願と信濃出兵の大義を論じ、第二節で鶴岡八幡宮への祈願と関東出兵の大義を、長尾家の先祖鎌倉五郎景正と鶴岡八幡宮との関係、また関東出兵の「筋目」と謙信の祈りを、願文を中心に分析している。

第三章では、上杉家相続後の謙信願文により、謙信の「筋目」と「仏法と王法」観を読み取っている。春日山城内の看経所に安置された祈願文より、謙信の内面を吐露した文言を読み取り、戦の「筋目」と「王法と仏法」の意味を探っている。飯塚八幡宮への祈願と「仏法王法」、弥彦神社への祈願では謙信の「節目」と信玄の「悪行」、仏法王法の回復等を読み取り、その背景を考えている。第四章では、謙信と高野山無量光院清胤との親交より、謙信が出家し法印権大僧都に任ぜられたこと、無量光院との師檀契約と謙信の法体(出家)等を高野山文書等より読み解き、その仏道修行についても紹介する。

第二部では、米沢藩における謙信の崇敬と祭祀について、謙信を継いだ景勝が米沢城内に創建した謙信廟(「御堂」みどう)における祭祀の実態や種々の祈祷を、五章を通して紹介している。第一章の景勝の米沢転封と御堂の建立では、御館の乱と景勝の上杉家相続、越後時代の謙信の供養、景勝の会津転封と謙信廟の移転、徳川家康の会津攻めと景勝の「筋目」、景勝の米沢転封と御堂の建立の経緯を詳しくたどる。第二章では、米沢藩における謙信・景勝の供養と歴代藩主の供養についての特色を指摘する。景勝の遺言状と定勝による景勝の供養、歴代藩主への「法印権大僧都」贈官と法音寺の院室兼帯、上杉家と江戸浅草の寶蔵院等について検討している。

第三章の御堂における宗教儀礼では、御堂における宗教儀礼、年中行事を紹介する。最初に『御堂秘書』により、謙信御霊屋が本堂と呼ばれ、本尊として謙信遺骸を安置するが、その宮殿は景勝が封印したと伝えることなど、御堂内陣の構造を紹介する。その管理には真言密教寺院あたり、法要に関係する謙信ゆかり密教法具等についても言及する。ついで『御堂年中行事』により、恒例の年中行事、歴代藩主の供養を紹介する。二の丸寺院の僧衆による毎日の法要、正月行事、盆施餓鬼、季節の法要が紹介されていて興味深い。次いで、謙信の命日法要、歴代藩主の命日法要等については、その勤行式を紹介している。第四節では、正・五・九月の二日から四日(二夜三日)にわたる「恒例御祈祷」(亡敵の怨霊供養)と、それに続く四日から六日迄の「別事祈祷」(浅野主従の怨霊供養)を考察している。両祈祷ともに護国經典読誦により怨霊の鎮魂と成仏により藩の安泰を祈っている。五節で紹介する「御武具召始(おんぶくめしはじめ)式」は、新藩主が初入部後の正月十三日(謙信の月忌)に御堂に参詣、謙信壇の前で具足を着けた勇姿を披露する儀式である。また、米沢藩では災害、飢饉が続くと、諸寺社において祈祷会を実施しているが、御堂においては藩主自らが参籠し、五穀豊穰を祈願、その霊験が「宗廟の神威」と賛嘆されていたことを指

摘している。

第四章の御堂における上杉憲政の祭祀—怨霊から御家擁護神への転換—では、上杉憲政の死と照陽寺における供養を紹介した上で、米沢藩における憲政の祭祀における憲政の霊が怨霊から御家擁護神への転換した経緯を論じている。第五章では、二の丸寺院の火災に関する賞罰、御堂本堂の焼失と再建の経過をとおして、幕府との再建の交渉、藩における御堂の重要性を論じている。

第三部では、藩政期における謙信御堂の祭祀が明治維新を迎え一変したことを、上杉神社の創建とその崇敬をとおして考察している。第一章では、仏式の御堂から神式の上杉神社に転換する過程をたどる。旧藩主による社殿造立と最初の祭典、謙信の遺骸を御堂から歴代廟所へ移すことに対する上杉家と旧藩主の対立を通して、両者の心情を伺っている。また、神社の県社から別格官幣社への昇格、日清戦争に出征する旧藩士、日露戦争の勝利を祝う越後流軍学者たちの神社崇敬の実態も紹介している。

第二章の屯田兵による神社の建立と米澤有爲會支部における上杉神社の遙拝式では、屯田兵として北海道厚岸郡太田村(厚岸郡厚岸町)に入植した旧藩士にとって、上杉神社崇敬が生活の支えとなっていた一面を紹介するとともに、米澤有爲會支部の発足について述べている。

[2] 審査結果の要旨

本論文は冒頭で述べたように、上杉謙信の生涯と信仰、謙信没後の崇敬と祭祀の歴史的な展開を、米沢藩を中心に論じたものである。米沢藩の謙信御堂が謙信や歴代藩主の供養の場であったことを詳細に論じ、米沢藩・上杉家の安泰を祈る場であり精神的な支柱であったことを明らかにしている。謙信の崇敬と祭祀について、通史的な研究はあるが、十分に追求されているとはいいがたい。その点、具体的な史料に基づいて展開された実証的な叙述は説得力を有し貴重である。真言宗による法要のあり方など、本論文により明らかにされた儀礼、供養も数多くある。よって本論文は謙信の信仰と祭祀の変遷史の基本的文献の一つとして評価できる。

著者自身が結語の研究成果と課題において述べているように、本論文には課題や問題点も少なからずある。第一部の謙信に関する古文書や起請文、第二部の『謙信年譜』『景勝年譜』など後世の編纂物に収録された古文書・古記録を根拠にしての立論等については、叙述内容に関する史実の確定のための史料批判、調査は不可欠であり、さらなる慎重な検討が必要であることはいうまでもない。

また、以下のような課題もあることを指摘しておきたい。第二部第三章第四節「怨霊供養の祈禱」で、「亡敵ノ怨霊」について述べられている。これは近世の十八世紀初頭になって、特に死者の怨霊の祟りがことさら強調されてきたことを具体的に論じており、近世の武家社会における御霊信仰ともいえるべき事例の紹介としてたいへん興味深い。ここでの怨霊とは、謙信や景勝に滅ぼされた者たちを指し、たとえば織田信長に内通したとして、謙信に殺されたとされる柿崎景家等があげられているが、この時期に来て、なぜ怨霊の祟りがこれほどまでに強調されるようになったのか。さらに、謙信の義理の父でもある上杉憲政も祟り神として捉えられ、死後130年を経て、ようやくその供養が始まったとされているが、18世紀という時期に怨霊供養が強調された背景には何があったのか。史料が

限られているであろうが、他藩の事例と比較するなど、何らかの分析の方法があったのではないかと思われる。

第三部の近代の上杉神社創設に関して、明治四年にそれまで仏教式で祀られていた御堂の祭祀を神祭に改め、歴代の藩主たちは神として祀られるようになった。さらに謙信の勤王の遺勲により、明治三十五年には上杉神社は別格官幣社へと昇格する。このような、それまでに御堂における仏教式の祭祀から、近代初期における国家神道に則った祭祀への変遷が見られたことは興味深いが、一方で大正十三年には、上杉家の家政改革によって謙信の祭祀は再び仏教式に復され、以後は法音寺で祀られるようになるという。このような両極端ともいえる祭祀形態の目まぐるしい変化の背景には、いったい何があったのか。また、かつての藩主たちの祭祀のあり方をめぐる権限は、どのような立場の者たちが握っていたのか。換言すれば、だれの意向によって謙信をはじめとする藩主たちの祭祀が目まぐるしく変化したのか。その点の考察がやや不足していると思われる。本論文の中で、非常に重要な位置を占める問題であるだけに、より突っ込んだ分析が求められる。

近年、武士祭神の調査研究は全国的に行われ、2018年には高野信治『武士神格化の研究』研究編、資料編等により基礎的データが公刊されている。武士の神格化、祭祀についての創始・祭祀の時期、背景など虚実あわせて伝えられていることのデータが、ゆかりの郷土資料館、博物館等においてすすめられている。本論文は今後の武士神格化、祭祀の研究の基礎的叙述として踏まえられていくべきものであり、審査員は一致して、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認める次第である。